

## シンポジウム 5

## 人・モノ・情報

——医学と医療の近代化から見た大阪について

ヴォルフガング ミヒエル

九州大学大学院言語文化研究院

で大阪は広い範囲を動かす力を秘めていた。

モノが与えるインパクトは大きかったに違いない。輸入薬物の真偽を鑑別するためには、西洋と同様に豊富な経験と参考資料が不可欠である。モノの観察と比較、関連情報の収集と整理は近代自然科学の「一里塚」でもある。また、普及促進のためには薬品の効能と用法に関する知識も必要なので、医師と薬種商との交流は双方にとって重要だった。

南蛮人が日本の医療に残した足跡は極めて限られているが、西洋医学の流入と浸透に継続性及び一定の整合性が見られるようになった一七世紀半ば以降、関西地方は西洋医学と医療の受容において重要な役割を果たした。大阪は東インド会社及び唐船との管理貿易に組み込まれ、医薬品流通体制の中心となったのみならず、それにとまなう全国各地との人的交流により、中央と地方の情報を蓄積する拠点都市でもあった。もちろん異国人及び各種情報を最も速く入手できた阿蘭陀・唐通詞との交流の場であった長崎を抜きにして江戸日本の発展は語れないが、立地、人口、経済力など

ここで、京都の洗練された趣向と要求の重要性も見過ごしてはならない。一定の経済的余裕を確保できれば異国趣味が高度化し、好奇心は知的好奇心に転換し、やがて間長涯や木村兼葭堂のような商人学者が誕生する。同時代の西洋の自然科学者や珍品収集家たちに比べ、日本の文人たちの知と技能は圧倒的に幅広い。儒学者、博学者であるとともに収集家、画家、出版業者でもあった木村兼葭堂（一七三六～一八〇二）及び人体解剖、物理、天文、数学、眼の光学機能の研究などで名を残した中天游（一七八二～一八四一）は大阪の代表的な事例である。さらに一般的日本人の識字率及

び当時の出版文化を考慮に入れれば、日本の近代化の減速は個人の資質とは無関係であり、むしろ政策及び構造に帰する問題であることがわかる。

また、人口密度の高い大都市ではこのような好奇心や知識欲を持つ人々の数の多さが質の高さへと変化し、サロンや塾を中心に互いに刺激し合い支え合うネットワークが形成される。この文脈の中で橋本宗吉（一七六三〜一八三六）のような当初経済的に恵まれなかった秀才も台頭してくる。一九世紀に入り、西洋の学問の幅広さと、出島商館医による口述でカバーされる知識の限界が鮮明になり、自力での蘭書の読解がますます重要視された。緒方洪庵の適塾の語学教育及び道修町の医薬品、多数の蔵屋敷、異国品にあふれる店舗等々の面で、大阪は蘭方を志す若者の遊学先として、江戸と長崎の有力な競争相手だった。

幕府による規制が解かれ明治三年に新政府がドイツ医学の採用を決定した際、江戸期に蓄積された大阪の底力が再び発揮される。輸入された医薬品と医科器械だけに頼って新しい医療体制を地方まで広めるのは財

政的に困難だったが、後退する漢方薬に未来を託せなくなつた道修町の薬種業者の中から山口庄兵衛や白井松之助のような柔軟性や決断力、先見の明を持つ人物が現れ、新型の医科器械を輸入、販売を行うとともに、刀剣師、鉄砲鍛冶、硝子職人などのものづくり職人の技術力を生かし、医学校、大学、開業医との密接な協力のもとで短期間で国産化に成功した。